



Title	チュヴァシ語における条件副動詞の短形と長形について
Author(s)	菱山, 湧人
Citation	北方言語研究, 14, 23-35
Issue Date	2024-03-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92094
Type	bulletin (article)
File Information	02_Hishiyama.pdf



[Instructions for use](#)

[特集 副動詞]

チュヴァシ語における条件副動詞の短形と長形について¹

菱山 湧人

(日本学術振興会／新潟大学)

キーワード：チュヴァシ語、副動詞、条件、コーパス

0. はじめに

チュヴァシ語(チュルク諸語オグル語群)には短形と長形を持つ形態素がいくつか存在し、本稿で扱う条件副動詞²は短形 *-sAn* と長形 *-sAssĀn* を持つ。これらは主に継起、条件、仮定を表わすほか、接語と共に用いられて譲歩、願望も表わしうる。短形と長形の異同についてはこれまで十分に研究されておらず、両形式とも同じ意味を表わすとしている先行研究もあれば、両形式に異なる訳をあてている先行研究もある。

本稿では、定量的調査および容認度調査の結果に基づき、1) 長形はほぼ全ての用法において短形と置き換えが可能であること、2) 長形の出現頻度が平均で全体の約 6%と著しく低いこと、3) 接続詞的表現と副詞的表現で長形の出現頻度に平均からの著しい偏りが見られるが、高い場合でも全体の約 13%であること、4) 一部表現で長形の容認度が低いこと、を示す。以上の調査結果に基づき本稿では、長形を「比較的稀に使用される二次的な形式」とする Landmann (2014: 95) の記述が妥当であると結論付ける。

本稿の構成は次の通りである。まず第 1 節で先行研究をもとに条件副動詞の形式と機能についてまとめ、問題提起を行う。次に第 2 節で短形と長形の異同に関する調査の方法と結果について述べ、考察を行う。最後に第 3 節で結論と今後の課題を挙げる。なお、非日本語文献の翻訳、ラテン文字転写³、例文番号、グロス、文字飾り、表は特にことわりのない限り筆者によるものである。

1. 条件副動詞の形式・機能

チュヴァシ語の副動詞とされる形式には、形態的に分析不可能なものと分析可能なもの

¹ 本研究は JSPS 科研費(研究課題 23KJ1014)の助成を受けている。本稿の草稿は、日本言語学会第 166 回大会ワークショップで発表し、共同発表者および参加者の方々から貴重なコメントを賜った。ここに記して感謝申し上げたい。有益なコメントを下された 2 名の査読者にもお礼申し上げたい。ただし、本稿における誤謬は全て筆者の責に帰するものである。

² Haspelmath (1995: 3) は副動詞 (converb) を a nonfinite verb form whose main function is to mark adverbial subordination と定義しており、本稿での副動詞の定義もそれに準ずる。*-sAn*, *-sAssĀn* の先行研究での名称は様々であるが、条件の用法で用いられる頻度が高いこと、他のチュルク諸語の対応形式が条件形と呼ばれることを考慮し、本稿では条件副動詞と呼ぶことにする。グロスは便宜上、CVB.COND に統一する。

³ 例文中の、ロシア語の音韻体系に従って発音される比較的新しいロシア語からの借用語のラテン文字転写は Timberlake (2004: 25) にある linguistic 方式に従う。異なる転写法であることを示すため、それらの借用語は斜体で示す。

がある⁴。本研究で対象とする条件副動詞は前者である。チュヴァシ語の条件副動詞の特徴的な点は、形式面では短形 *-sAn* と長形 *-sAssĀn*⁵ を持つ点と人称標識が付加しない点、機能面では条件・仮定だけでなく継起も表しうる点である⁶。以下の表 1 に、チュヴァシ語の分析不可能な副動詞と、他の主なチュルク諸語のうち話者数が最大のトルコ語（南西語群）と、チュヴァシ語の近隣言語であるタタール語（北西語群）の対応する副動詞を挙げる。

表 1：チュヴァシ語、トルコ語、タタール語の分析不可能な副動詞

	チュヴァシ語	トルコ語	タタール語
先行「～して」	<i>-sA</i>	<i>-(y)Ip</i>	<i>-(E)p</i>
継続・反復「～しながら」	<i>-A</i>	<i>-(y)A</i>	<i>-A/-y</i>
継起「～すると」	<i>-sAn</i>	<i>-(y)IncA</i>	<i>-GAč</i>
条件・仮定「～すれば」	<i>-sAssĀn</i>	<i>-sA+人称</i>	<i>-sA+人称</i>

(Clark 1998: 446; Johanson and Csató 1998: 216; Berta 1998: 294-295 をもとに筆者作成)

以下に先行研究に挙がっている短形・長形の例を用法別に示す。チュヴァシ語の条件副動詞は、継起「～すると（～した）」(1-3)、条件「～すれば（～する）」(4, 5)、仮定（反実仮想）「～すれば（～するのに）」(6) を表わすほか、累加の接語 *=tA* とともに譲歩「～しても」(7, 8)、過去の接語 *=(č)čë* とともに文末で願望「～すれば（なあ）」(9, 10) を表わす。

継起

主節動詞が過去の出来事を表わす場合は継起「～すると（～した）」を表わす。Clark (1998: 446) は *-sAn*, *-sAssĀn* が時間節 (clauses of time) を標示するとし、*-sAn* が主節事態に先行する動作を表わす節の述語となっている (1) を挙げている。

(1) Вăл калама чарăнсан, ăна ыйтусем пачѣс.

văl kala-ma čarăn-san ăna iytu-sem pa-č-ěs
 それ 話す-INF やめる-CVB.COND それ.DAT/ACC 質問-PL 与える-PST-3PL
 「彼が話すのをやめると、彼に質問がなされた。」

(Clark 1998: 446)

⁴ チュヴァシ語の伝統文法 (Sergeev, Andreeva, and Kotleev (2012) など) では、副動詞を「古くからある副動詞」(分析不可能な副動詞に相当) と「新しくできた副動詞」(分析可能な副動詞に相当) の 2 つに分類している。

⁵ 母音調和による異形態 (短形: *-san/-sen*、長形: *-sassăn/-sessën*) を持つ。本稿で用いる他の接辞や接語の代表形も、同様に交替する部分を大文字で表す。

⁶ アルタイ型言語における条件と継起の連続性について論じている風間 (2017: 35) は、アルタイ型言語には典型的な条件形以外に、条件的用法と時間節的用法を併せ持つ形式が存在するとし、そのような形式を「疑似条件形式」と呼んでいる。*-sAn*, *-sAssĀn* はチュヴァシ語の「典型的な条件形」であり、よってこれらは疑似条件形式ではないが、継起用法を併せ持つ点で疑似条件形式と類似している。なお、チュルク諸語ではチュヴァシ語以外にキルギス語とカラチャイ・バルカル語も条件形式が継起用法を持つ (アクマタリエワ、菅沼 p.c.)。

Krueger (1961: 165) は副動詞形 *-sAn* が反復されうることに言及し、(2) を挙げている。

- (2) *Ўӳресен ӳӳресен пӳр юман патне ӳитнӳ.*

šüre-sen šüre-sen p̄r yuman patne šit-ně
 歩く-CVB.COND 歩く-CVB.COND 一 オーク もとに 着く-PRF
 「(長い時間) 歩きに歩くと、一本のオークの木に辿り着いた。」

(Krueger 1961: 165)

以下の (3) は長形の例である。条件副動詞に強調の接語 *=Ax* が付加すると、主に即時性の意味が加わり、「～するやいなや」を表わす。

- (3) *тутарсем хӳйсем кайсассӳнах тӳпетейккисене хывса пӳрахнӳ*

tutar-sem x̄y-sem kay-sass̄an=ax t̄peteykki-sene
 タタール人-PL 自身.3.POSS-PL 行く-CVB.COND=EMPH テュベテイカ-PL.DAT/ACC
x̄iv-sa p̄rax-n̄ă
 脱ぐ-CVB.SEQ 捨てる-PRF

「タタール人たちが去ると (すぐ)、彼らはテュベテイカを脱ぎ捨てた」

(風間・菱山 2020: 421)

条件

主節動詞が現在・未来の出来事を表わす場合は条件「～すれば(～する)」を表わす。Sergeev, Andreeva, and Kotleev (2012: 395) は *-sAn*, *-sAss̄An* が時間・条件を表わすが、否定形は常に条件を表わすとし、(4) を挙げている。なお否定形は、動詞語根に否定接辞 *-mA* が付加した否定語幹に基づく。(5) は長形 (肯定形) の例である。

- (4) *Вӳренмесен ӳӳпата ху́сма та пӳлеймӳн.*

v̄ren-me-sen š̄pata xuś-ma=ta p̄l-ey-m-ěn
 学ぶ-NEG-CVB.COND わらじ 編む-INF=ADD 知る-PSB-NEG-FUT.2SG
 「学ばなければ、わらじを編むこともできない。」

(Sergeev, Andreeva, and Kotleev 2012: 395)

- (5) *хамӳрӳн турӳсене урӳхда каласассӳн, наверное, тӳрӳсрех пулать пуль*

ham̄r-ăn tură-sene urăx-la kala-sass̄an,
 自身.1PL.POSS-GEN 神-PL.DAT/ACC 他の-ADV LZ 言う-CVB.COND
navernoie, t̄r̄s-r̄ex pul-at' pul'
 多分 正しい-COMP なる-PRS.3SG MOD

「私たち自身の神々を違った風に言えば、多分、より正しくなるだろう。」

(風間・菱山 2020: 434)

仮定

主節動詞が反実仮想を表わす場合は仮定「～すれば（～するのに）」を表わす。Clark (1998: 446) は、主節動詞が接続法形式の場合は *-sAn, -sAssĀn* が条件節を標示するとし、(6) を挙げている。長形が仮定の用法で用いられている例は先行研究からは見つけられなかった。

- (6) *Çинчех тухтър патне кайнă пулсан, чърелеччѐ-и тен ман ача?*

šincex tuxtär pat-ne kay-nă pul-san
すぐ 医者 所.3.POSS-DAT/ACC 行く-PRF である-CVB.COND
čerel-ěččě=i ten man ača
治る-SUBJ.3SG=Q 多分 1SG.GEN 子

「すぐ医者に行っていたら、私の子供は治っていただけるか？」

(Clark 1998: 446-447)

譲歩（+累加の接語）

累加の接語 *=tA* が付加すると譲歩「～しても」を表わす。長形の場合 (8) も同様である。

- (7) *Кѐркунне пулсан та түпе тăрă.*

kërkunne pul-san=ta tüpe tără
秋 である-CVB.COND=ADD 空 澄んだ
「秋であっても空は澄んでいる。」

(Landmann 2014: 97)

- (8) *даже Иван Яковлевич Яковлев килсессѐн те Иван Яковлевича пăхăнман*

daže Ivan Jakovlevič Jakovlev kil-sessën=te Ivan Jakovlevič-a păxăn-man
さえ PN 来る-CVB.COND=ADD PN-DAT/ACC 従う-NEG.PRF

「あのイヴァン・ヤコブレヴィチ・ヤコブレフが来ても、イヴァン・ヤコブレヴィチに従わなかった」

(風間・菱山 2020: 419)

願望（+過去の接語）

過去の接語 *=(č)čě* が付加した形式は文末で願望「～すれば（なあ）」を表わす。長形の場合 (10) も同様である。

- (9) *Икѐ кунлăха мар, икѐ сăмахлăха та пулин килсе кăтартсанччѐ!*

ikë kun-lăx-a mar, ikë sămax-lăx-a=ta pulin
二 日-ADJLZ-DAT/ACC COP.NEG 二 言葉-ADJLZ-DAT/ACC=ADD であれ
kil-se kătart-san=ččě
来る-CVB.SEQ 見せる-CVB.COND=COP.PST

「二日間ではなく、一目だけでも来て（姿を）見せてくれたらなあ！」

(Pavlov 2014: 298)

(10) Эсир пурсăр та ăак Лаврентий Моисеев пек тăрăшса вĕренессĕнчĕ...

esir pursăr=ta śak Lavrentij Moiseev pek
 2PL 全て.2PL.POSS=ADD この PN ように
 tărăš-sa vĕren-sessĕn=čĕĕ
 努める-CVB.SEQ 学ぶ-CVB.COND=COP.PST

「君たちがみんなこのラヴレンティ・モイセエフのように頑張って勉強すればなあ…」

(Pavlov 2014: 298)

本研究では、短形と長形の異同に着目する。両形式の異同については、これまで十分に研究されているとは言えない。Krueger (1961), Clark (1998) は両形式の異同について記述しておらず、短形の例のみを挙げている。Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012: 397) は両形式について「意味の点で互いに異なっておらず、両形式とも同じ意味を持つ」とし、長形と短形がいずれも条件の用法で用いられている (11) を挙げている。

(11) ёĕсем пĕтссĕн, е кăшт ывăнсан ... тăван хире утатăп эп тухса

ěś-sem pĕt-sessĕn ye kăšt ĭvăn-san ...
 仕事-PL 終わる-CVB.COND または 少し 疲れる-CVB.COND
 tăvan xir-e ut-atăp ep tux-sa
 故郷の 大地-DAT/ACC 通る-PRS.1SG 1SG 出る-CVB.SEQ

「仕事が終わったら、または少し疲れたら、＜中略＞私は出て、故郷の大地を歩く」

(Sergeev, Andreeva and Kotleev 2012: 397)

Pavlov (2014) は長形が現れた例文は挙げているものの、両形式の異同には言及していない。Landmann (2014: 95) は長形を「比較的稀に使用される二次的な形式」とし、両形式とも時間節も条件節も表すと述べているが、長形が現れた例文は挙げていない。風間・菱山 (2020: 602) は長形が現れた例文も多く挙げつつも、両形式について「その機能的な違いはなお十分明らかであるとは言えない」としている。

両形式に異なる訳をあてている先行研究も存在する。ドイツ語で書かれた先行研究 Benzing (1963: 70) は、短形の訳語として wenn (when/if)、長形の訳語として nachdem (after) を用いており、kil-sen を wenn man kommt, als man kam ({when/if} one comes, when one came)、kay-sassăn を nachdem man gegangen ist/war (after one {has/had} left) と訳している。しかし、記述は 2 行のみであり、例文は挙がっていない。(1-11) から分かるように、両形式とも継起・条件を表しうるため、このような訳し分けは適切ではない。

本研究は、定量的調査と容認度調査により、両形式の頻度および用法における異同を詳細に明らかにすることを目的とする。

2. 短形・長形の異同に関する調査

本節では 2.1 節で調査方法、2.2 節で調査結果と考察を述べる。

2.1. 調査方法

まず、チュヴァシ語のオンラインコーパス Čävaš čělxin ikčělxellě süpsi (チュヴァシ語 2 言語コーパス)⁷ を用いて、短形と長形の出現頻度を調べた。調査手順は以下の通りである。

定量的調査 1

- ・ コーパスの出現頻度リストで上位の基本的な動詞 (pul-「なる、である」、te-「～と言う」、kala-「話す」、kur-「見る」、šit-「達する」、kay-「行く」、il-「取る」、tux-「出る」、păx-「見る」、tu-「する」など) の条件副動詞形 (短形と長形それぞれ) を入力して検索し、ヒット数を調べた⁸。
- ・ 否定形、接語付加形式 (累加の接語 =tA、過去の接語 =ččě、強調の接語 =Ax が付加した形式) も同様に調査した。

定量的調査 2

- ・ 調査 1 で短形と長形の合計数が最も多かった pul-「なる、である」、長形の比率が最も高かった te-「～と言う」、長形の比率が最も低かった kala-「話す」の 3 動詞を対象とした。
- ・ まず、これら 3 動詞の条件副動詞形 (短形と長形それぞれ) を入力して検索し、pul- は短形と長形を 100 例ずつ、te- と kala- は短形と長形を 50 例ずつ抽出した。
- ・ 次に、抽出した例における条件副動詞の用法と、主節述語など文中で共起する要素を調べた。
- ・ 必要に応じて、特定の表現のヒット数を完全一致検索で調べた。

次に、コーパスから抽出した一部例文の短形を長形に置き換えたものをコンサルタント 2 名 (チュヴァシ共和国出身の男性 A. G. 氏および女性 A. S. 氏) に提示し、容認度を調べた。

2.2. 調査結果と考察

本節では、2.2.1 節で定量的調査 1、2.2.2 節で定量的調査 2、2.2.3 節で容認度調査の結果と考察を示す。

⁷ 総語数約 1,572 万語 (2023 年 12 月 14 日現在)。タグなしコーパス。多くの例文にはロシア語の対訳が付いている。検索窓は一つのみ。2023 年 12 月現在、リアルタイムで更新作業 (新テキストの追加、ロシア語訳付け作業) が行われている。新聞・雑誌の記事、ニュース、散文集、宗教関連のテキストなどを含む。本稿で出典の明記されていない例は、本コーパスから抽出されたものである。

⁸ 出現頻度の高い動詞を調査対象とした理由は、1) 短形と長形の概ねの全体的な出現頻度を割り出すため、2) 両形式の出現頻度に影響する諸要因を検証するのに十分なデータ数が確保できるため、である。なお、これらの動詞の多くは本文中に示した語彙的意味を表わすほか、文法的意味を表わす補助動詞としての機能も持ち、慣用表現でも用いられる。

2.2.1. 定量的調査 1

調査の結果、長形の出現頻度は全体の約 10%以下と著しく低いこと、両形式の出現頻度は動詞語幹や共起する接辞・接語によって差があることが分かった。以下、肯定形⁹、否定形、接語付加形式に分けて結果を挙げる。

① 肯定形

肯定形では長形の出現頻度は平均で全体の約 6%であった。以下の表 2 に、条件副動詞（短形＋長形）のヒット数が最も多かった動詞 10 個の調査結果を示す。

表 2：調査結果（全体的な出現頻度）

		短形	長形	短形＋長形
pul-	なる、である	30,120	1,384 (4.4%)	31,504
te-	～と言う	11,940	1,422 (10.6%)	13,362
kala-	話す	4,560	58 (1.3%)	4,618
kur-	見る	3,658	280 (7.1%)	3,938
šit-	達する	3,392	288 (7.8%)	3,680
kay-	行く	3,152	218 (6.5%)	3,370
il-	取る	2,353	107 (4.3%)	2,460
tux-	出る	2,219	168 (7.0%)	2,387
päx-	見る	2,015	108 (5.1%)	2,123
tu-	する	1,949	88 (4.3%)	2,037
合計		65,358	4,121 (5.9%)	69,479

表 2 のデータにさらに 12 個の動詞のデータを加えて算出した長形の割合は 5.8%であった¹⁰。より多くの動詞を加えても、長形の割合は 6%弱に収束することが予想される。

一つ一つの動詞に着目すると、短形と長形の合計数は pul-「なる、である」が著しく多いこと、長形の比率は te-「～と言う」が平均より著しく高いこと、長形の比率は kala-「話す」が平均より著しく低いことが分かる。これら 3 動詞については次節で詳述する。

音節数が 2 以上の動詞は、長形の出現頻度が平均よりやや低い（2 音節：pëter-「終える」(5.1%)、tütän-「取り掛かる」(4.9%)、tavrän-「帰る」(3.4%)、kala-「話す」(1.3%)、3 音節：šuxäšla-「考える」(2.1%)）。よって、動詞語幹の音節数も長形の出現頻度に影響している可能性がある。

⁹ 累加の接語 =tA は正書法では分ち書きされるため、コーパスで条件副動詞形を入力して検索すると、累加の接語 =tA が後続した形式もヒットする。よって、表 2 に示した肯定形の数値には、累加の接語 =tA が後続した例の数も含まれていることに注意されたい。③の接辞付加形式に示した累加の接語が後続した例の数は、ダブルクォーテーションを用いた完全一致検索をすることで得られたものである。

¹⁰ 12 個の動詞は、irt-「過ぎる」、ilt-「聞く」、kil-「来る」、tär-「立つ」、kër-「入る」、pël-「知る」、tavrän-「帰る」、par-「与える」、pušla-「始める」、pür-「向かう」、tütän-「取り掛かる」、pëter-「終える」である。これらは条件副動詞形（短形＋長形）のヒット数が 900~2,000 の動詞である。

② 否定形

表 2 に挙げた 10 動詞を対象に否定接辞 **-mA** と共起した否定形 **-mA-sAn** / **-mA-sAssĀn** を調査したところ、長形の割合は 5.0%と、肯定形に比べてわずかに低かった（当該形式の出現数は合計 1,775 例で、そのうち短形が 1,687 例、長形が 88 例であった）。これは、否定接辞がある分より音節数が長くなる長形が、経済性の面でより合理的でないためである可能性がある。

③ 接語付加形式

否定形に接語が付加した形式はヒット数が非常に少なかったため、以下では肯定形に接語が付加した形式についての結果のみを挙げる。

・累加の接語 =tA（譲歩）

表 2 に挙げた 10 動詞の条件副動詞形（肯定形）に累加の接語 =tA が後続した形 **-sAn=tA** / **-sAssĀn=tA** を調査したところ、長形の割合は 3.6%であった（当該形式の出現数は合計 10,131 例で、そのうち短形が 9,766 例、長形が 365 例であった）。この結果から、譲歩の用法では長形の出現頻度がやや低いことが示唆されるが、理由の解明は今後の課題である。

・過去の接語 =ččě（願望）

表 2 に挙げた 10 動詞の条件副動詞形（肯定形）に過去の接語 =ččě が後続した形 **-sAn=ččě** / **-sAssĀn=ččě** を調査したところ、長形の割合は 9.5%であった（当該形式の出現数は合計 222 例で、そのうち短形が 201 例、長形が 21 例であった）。出現数が少ないため単純に比較はできないが、この結果から、願望の用法では長形の出現頻度がやや高いことが示唆される。理由の解明は今後の課題である。

・強調の接語 =Ax（即時）

表 2 に挙げた 10 動詞の条件副動詞形（肯定形）に強調の接語 =Ax が付加した形 **-sAn=Ax** / **-sAssĀn=Ax** を調査したところ、長形の割合は 5.5%であった（当該形式の出現数は合計 2,421 例で、そのうち短形が 2,287 例、長形が 134 例であった）。この結果から、強調の接語は短形と長形の出現頻度に大きく影響しないことが示唆される。

2.2.2. 定量的調査 2

調査の結果、(12) のように長形が仮定を表わす例も観察され、短形・長形ともに第 1 節で挙げた各用法で用いられうることが確認された¹¹。よって、短形と長形に大きな機能的差異はない（いずれも第 1 節で挙げた基本的な用法を持つ）といえる。

¹¹ ここでは先行研究に挙げられていない、長形が仮定を表わす例である (12) のみを挙げる。その他の形式と用法の対応については第 1 節で挙げた (1-10) と同様であるため、(1-10) を参照されたい。

(12) *Џуначёсем пулсассан вёсёччё те кайёччё.*

šunač-ě-sem pul-sassān vės-ěččě=te kay-ěččě
 翼-3.POSS-PL ある-CVB.COND 飛ぶ-SUBJ.3SG=ADD 行く-SUBJ.3SG
 「翼があれば飛んでいくのに。」

他方で、接続詞的表現や副詞的表現では両形式の頻度に平均からの著しい偏りが見られることが分かった。以下に、調査した動詞別に特に顕著な差異を挙げる。

① **pul-**「なる、～である」

- ・ 定形動詞に後続する例は、短形で 100 例中 26 例 (26%) に対し、長形は 100 例中 15 例 (15%)。
- ・ (13) のような対比「～である一方」の例は、短形で 100 例中 4 例 (4%) に対し、長形は 100 例中 0 例。

(13) «Чăваш пики» конкурса хёрсем амăртаççё пулсан, ку конкурса вара каччăсемшён йёркеленё.

«čävaš piki» konkurs-ra xěr-sem amärt-aššě pul-san
 ミス・チュヴァシ コンテスト-LOC 女性-PL 競う-PRS.3PL である-CVB.COND
ku konkurs-a vara kaččă-sem-šён yёрkele-nё
 この コンテスト-DAT/ACC は 男性-PL-PURP 催す-PRF

『ミス・チュヴァシ』コンテストでは女性が競う一方、このコンテストは男性のために催される。」

② **te-**「～と言う」

- ・ 例の大半を占める接続詞的表現 *měňšён te-{sen/sessён}* 「なぜなら (lit. なぜかと言えば)」は、短形が 7,326 例に対し長形は 1,072 例 (長形の割合は 12.8%)。

③ **kala-**「話す」

- ・ *tёрёssipe kala-{san/sassån}* 「正確に言えば」や *pёр samaxpa kala-{san/sassån}* 「一言でいえば」のように文全体を修飾する副詞的表現は、短形で 50 例中 44 例 (88%) に対し、長形は 50 例中 19 例 (28%) (上述の 2 つの表現は、短形が合計 1,306 例に対し長形は 1 例)。

その他の顕著な点は以下の 2 点である。

- ・ 条件副動詞の前後に同じ語が現れる「A であれば A」(例: *balkon pul-san balkon* 「バルコニーであればバルコニー」)、「B と言えば B」(例: *payan te-sen payan* 「今日と言えば今日」) のような表現が数例抽出されたが、これらではいずれも短形が用いられていた。
- ・ (2) のように同一の条件副動詞が反復した例は、短形・長形ともに調査した 3 動詞 200 例の中からは 1 例も抽出されなかった (調査した 3 動詞が意味的にこの表現ではほとんど用いられないためと思われる)。

定形節に後続するコピュラ動詞 *pul-* の条件副動詞形は、節と節をつなぐため接続詞的であると言える（短形 *pulsan* はこの形で辞書に載っており、訳語としてロシア語の接続詞 *jesli* 「もし」があてられている）。この接続詞的用法では短形の割合が平均より高いことが示唆され、これが *pul-* で長形の割合が 4.4% と平均の 5.9% よりやや低いことの一因であろう。*te-* 「～と言う」で長形の割合が 10.6% と比較的高いのは、頻出の「なぜなら」を意味する接続詞的表現で長形が 12.8% と平均の 2 倍以上の割合で出現するため、*kala-* 「話す」で長形の割合が 1.3% と著しく低いのは、頻出の副詞的表現で専ら短形が用いられるためであると言える。

コピュラ動詞 *pul-* の接続詞的用法で短形の割合が平均より高いこと、*kala-* を用いた副詞的表現で専ら短形が用いられること、「なぜなら」を意味する接続詞的表現で長形の割合が高いこと理由は、今後解明する必要がある。

2.2.3. 容認度調査

調査において長形が抽出されなかった表現（対比、「A であれば A」、反復）に関して行った容認度調査の結果、長形に置き換えて容認不可となった例文はなかったものの、多くはいずれかのコンサルタントが短形の方がよいと回答した。同一の条件副動詞が反復された (2) のみ、2 名とも短形のほうがよいと回答した。

これらの表現でも長形が容認されることは、短形と長形の間に大きな機能的差異がないことを示唆している。長形の容認度がやや低いことは、これらの表現で長形の頻度がさらに低いことに起因すると考えられる。

3. 結論と今後の課題

1) 長形はほぼ全ての機能において短形と置き換えが可能であること、2) 長形の出現頻度が平均で全体の約 6% と著しく低いこと、3) 接続詞的表現と副詞的表現で長形の出現頻度に平均からの著しい偏りが見られるが、高い場合でも全体の約 13% であること、4) 一部表現で長形の容認度が低いこと、の 4 点から筆者は、長形を「比較的稀に使用される二次的な形式」とする Landmann (2014: 95) の記述が妥当であると結論付ける。

今後の課題としては、一部の用法や表現で頻度に偏りが見られる理由の解明に加え、長形の低頻度の要因の解明（経済性や文体など、考えられる諸要因の検証）、両形式の通時的発展の解明（頻度の低さや、古代チュルク語や現代チュルク諸語の対応形式からの類推で、長形が改新形式である可能性が考えられるが、その発展過程は不明である）、主節動詞に着目した調査、長形の談話上の機能に関する調査が挙げられる。以下の (14) は同じ文中で短形を長形に言い直している例であり、強調したい部分が長形で言い直されている点が注目される。

(14) *Ҙын ёҗлесен тоже пураһань, ёҗлесессён.*

şın ёşle-sen tože purān-at', ёşle-sessён

人 働く-CVB.COND また 生きる-PRS.3SG 働く-CVB.COND

「人は働けば生きる、働けば。」

(風間・菱山 2020: 302)

なお、接語 =tǎk はコピュラ動詞 pul- の条件副動詞形と類似の機能を持ち、これとの異同の調査も今後の課題である。A. S. 氏によると、以下の (15) で3形式は置き換え可能で、意味も同じであるように感じられるという。

(15) Унән вырәнәнче пулнă {пулсан / пулсассән / -тăк} сав утăма тăваяттăмччĕ-ши?

unăn vĭrăn-ĕ-nĕche pul-nă {pul-san /pul-sassăn /=tăk}

それ.GEN場所-3.POSS-LOC いる-PRF である-CVB.COND である-CVB.COND =COND

śav utăm-a tăv-ay-att-ăm=čĕĕ=ši

その 行動-DAT/ACC する-PSB-PST.PROG-1SG=PST=Q

「彼の立場にいたなら、私はその行動をできていただろうか？」

チュヴァシ語には条件副動詞接辞以外にも、一部の指示詞、一部の基数詞、一部の形容詞、不定形接辞など、短形・長形を持つ形態素が存在する。これらの中には短形・長形の間で明確な機能的差異を持つものもあれば、そうでないものもある。例えば基数詞は、単独で用いる場合は長形が、名詞を修飾する場合は短形が用いられる（例：pĕrre 「1」、pĕr śin 「1 人の人」）。不定形接辞（短形 -mA、長形 -mAškĀn）は筆者の調査によると、長形の頻度が全体の5%以下と著しく低いという点で条件副動詞と類似しているが、生起位置と機能により明確な偏りがある（短形が述語に隣接する例の割合が高いのに対し、長形は述語から離れた位置で副詞的に用いられる例の割合が高い）。条件副動詞接辞はどちらかと言えば明確な機能的差異がないものにあたるが、短形・長形の異同は基数詞以外の形態素についてはまだ十分に研究されておらず、チュヴァシ語における短形・長形の包括的な研究も今後の課題である。

略号一覧

1, 2, 3		1, 2, 3 人称	NEG	negative	否定
ACC	accusative	対格	PL	plural	複数
ADD	additive	累加	PN	person name	人名
ADJLZ	adjectivalizer	形容詞化	POSS	possessive	所有
ADV LZ	adverbializer	副詞化	PRF	perfect	完了
COMP	comparative	比較	PROG	progressive	進行
COND	conditional	条件	PRS	present	現在
COP	copula	コピュラ	PSB	possibility	可能
CVB	converb	副動詞	PST	past	過去
DAT	dative	与格	PURP	purposive	目的格
EMPH	emphasis	強調	Q	question	疑問
FUT	future	未来	SEQ	sequential	継起
GEN	genitive	属格	SG	singular	単数
INF	infinitive	不定形	SUBJ	subjunctive	反実仮想

LOC	locative	位格	-	接辞境界
MOD	modality	モダリティ	=	接語境界

参考文献

- Benzing, J. (1963) Das Tshuwaschische. In G. Annemarie von et al. (eds.) *Turkologie*, 61-71. Leiden, Köln: E. J. Brill.
- Berta, Á. (1998) Tatar and Bashkir. In: L. Johanson and É. Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*, 283-300. London, New York: Routledge.
- Clark, L. (1998) Chuvash. In: L. Johanson and É. Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*, 434-452. London, New York: Routledge.
- Johanson, L. and É. Á. Csató (1998) Turkish. In: L. Johanson and É. Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*, 203-235. London, New York: Routledge.
- Haspelmath, M. and E. König (eds.) (1995) *Converbs in cross linguistic perspective*. Berlin/New York: Mouton.
- 風間伸次郎 (2017)「条件と継起の連続性について: 疑似条件形式を中心として」『北方言語研究』7. 35-68.
- 風間伸次郎・菱山湧人 (2020)『チュヴァシ語の言語と文化 1』アルタイ言語文化論集 1. 東京: 東京外国語大学.
- Krueger, J. (1961) *Chuvash Manual. Introduction, Grammar, Reader, and Vocabulary*. Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series 7, The Hague: Mouton.
- Landmann, A. (2014) *Tschuwaschisch. Kurzgrammatik*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Pavlov, I. P. (2014) *Sovremennyj Čuvaškij jazyk: monografija: v 2 tomax. Tom 2: Morfologija*. Čeboksary: Čuvaškij gosudarstvennyj institut gumanitarnyx nauk.
- Sergeev, L. P., E. A. Andreeva and V. I. Kotleev (2012) *Čavaš čělxi: čavaš filologi fakul'tečën studenčësem valli xatërleñë vērenü këneki*. [チュヴァシ語: チュヴァシ文献学部の学生向けの教科書] Šupaškar: Čavaš këneke izd-vi.
- Timberlake, A. (2004) *A reference grammar of Russian*. Cambridge University Press.

調査資料

Čavaš čělxin ikčëlcellë šüpši [チュヴァシ語 2 言語コーパス] (<http://corpus.chv.su/>) [最終閲覧日: 2023/12/14]

On the Short and Long Forms of the Chuvash Conditional Converb

Yuto HISHIYAMA

(Research Fellow of JSPS / Niigata University)

The Chuvash conditional converb has two forms: the short form *-sAn* and the long form *-sAssĀn*. These forms mainly express the conditions or the anteriority of an action. This paper focuses on the difference between the short form *-sAn* and the long form *-sAssĀn*. Some studies have assumed that both forms express the same meaning, while one other study has assigned different translations to the two forms.

Based on the results of the quantitative and acceptability surveys, this paper shows that 1) the long form can replace the short form in almost all functions, 2) the frequency of occurrence of the long form is significantly lower, approximately 6% of the total, 3) the frequency of the long form is largely skewed from the average of approximately 6% in some conjunctive and adverbial expressions, but even when high, it is approximately 13% of the total, and 4) the acceptability of the long form is lower in some expressions. Based on the findings above, this paper concludes that Landmann's (2014: 95) description of the long form as a "relatively rarely used secondary form" is valid.

(ひしやま・ゆうと boltwatts@gmail.com)